

「落とし文」

投稿日：平成 21 年 5 月 29 日
会員投稿：石橋正彦

新緑の頃、公園などで沢山の白い花が咲き下がっていて、その根方一面に沢山の花を落としている木を良く見かけます。これがエゴの木で、あの有名な「えごの花 道白くして夏近し」の光景です。そのエゴの木を良く見ると、長さ 12mm くらい、幅 3mm くらいの小さな筒状のものがぶら下がっています。これが虫の作る「落とし文」なのです。

落とし文と聞くと何を思い浮かべますか。直接手渡せないで、そっと恋人に届ける恋文。ロマンチックですね。昔、直接手渡すのがはばかれるような密告や政治批判などをわざと気が付くように落としておいたのを落とし文とか落書・落首といったそうですが、ここでいう落とし文は、その中で卵から成長して成虫になるまでの虫の揺りかご、シェルター、食料庫なのです。この揺りかごからこの虫の名もオトシブミと呼ばれます。

オトシブミの仲間の揺りかごの作り方は、メスが若葉の主脈と葉の一部を切り、少ししおれ始めたところで噛み傷を入れながら二つ折りにし、巻いていきます。糊や糸のようなものは一切使わず、ただ折り紙のように葉を折りこみながら実に巧妙に巻いていくのです。途中で表面から穴を開け、中に卵を 1 個産み付けます。揺りかごが出来上がるまで 2・3 時間。孵化した幼虫は揺りかごの内部を食べて成長し、やがてさなぎとなり、1 ヶ月ほどで揺りかごに穴を開け、成虫となって抜け出てくるのだそうです。

オトシブミの仲間は幾種類かいるようですが、エゴの木に付くオトシブミは雄 7 mm、雌 5 mm くらいの黒色の甲虫で、エゴの花の季節に葉を巻くので揺りかごを見つけやすいです。このオトシブミの仲間はクリ、クロモジ、コナラ、クヌギ、シラカバ、などいろいろな木の若葉で揺りかごを作り、虫の種類によって作り方、形が決まっているのでそれを見れば虫の種類が判別できるそうですが、これらの木で落とし文を見つけようと思って気を付けて見ても、エゴの木以外にはなかなか見つかりません。それも木によって味が違うのか、好みがあるのか、どのエゴの木にも付いているというわけではなく、逆に去年付いていた木には今年も、といった具合です。

エゴノキに付くオトシブミは正式には「エゴツルクビオトシブミ」といって、雄の首が長いので鶴首の名がついています。首が長いことは葉を折り曲げたり、巻いたりするのにとても都合がよさそうなのですが、首の長いのは雄だけ。そしてその雄は揺りかごを作らず、首の短い雌が懸命に葉に切れ込みを入れたり、巻いたりするのをただそばで見ているだけだそうです。

一度その作業現場を見てみたいものと注意をして探して見るのですが、落とし文を作っている現場はおろか、オトシブミという虫の本体すら、そう簡単には見つかりません。以前テレビで東南アジアで撮影したオトシブミの作業振りを紹介していましたが、小さな体でとても巧妙に葉を切り、折り曲げ、巻いていく様子はまさに絶賛・感動ものでした。

普通の種類のオトシブミは葉を巻くとすぐに揺りかごを切り落とすので「落とし文」の名がついたようですが、エゴツルクビオトシブミの場合は葉の一部を残してゆりかごを作るので枝を見上げるといくつも枝先にぶら下がっています。中には製作途中なのか、あるいは途中で投げ出してしまったのか、半ばまで葉が巻かれたままのものもあります。

揺りかごを作る季節も終わり、梅雨の季節が来て、揺りかごがいつの間にか姿を消してしまうと、また来年の若葉の頃に「落とし文」を観察する楽しみに思いを馳せるのです。

(写真①は枝にぶら下がっているオトシブミの落とし文。②はエゴの花と落とし文。ペットボトルのキャップの大きさと比べてみて下さい。)

